経済教育ネットワーク
Network for Economic Education

東京部会（第 143 回）記録

日　時:	2025 年 2 月 8 日（土）15:00 － 17：00
場　所:	連合会館（お茶の水）202 会議室
参加者：	会場7名、zoom13名、計 20名

会場が慶応義塾大学ではなく、zoom による接続にも問題が生じて、開始が 15 分ほど遅くなったが、二つの報告と討論が行われた。

(1) 蘆名伸明先生（埼玉県立飯能高等学校）から「サステナビリティの視点を生かした授業をどうつくるか」の報告があった。

これは春の経済教室の講演者である松島斉先生の『サステナビリティの経済学』に触発された授業実践で、当日の討論で紹介する予定の報告である。

サスティナブルな社会を作る上で簡単に解決ができない貧富の差の是正、再分配に関して、経済学や倫理学の知見を用いて、解決にむけて行動出来るように生徒がなって欲しいという授業のねらいと、授業の手順を紹介された。手順は以下の通りである。

まず、架空の村を素材に、①センの笛の話をもとに 1 本の笛を 3 人のだれにプレゼントするかが正しいかを生徒に問い、②松島先生の本にある指摘を踏まえてより公平な分配をするにはどうするかを、質問の仕方を変えて問う。③さらに、3 人の詳しい状況がさらに分かってお金が支給されるとしたら、それぞれ誰にどの程度わけるかを問う。次に、そのストーリーを現実の社会に広げ、④奨学金にお金を拠出するか、また、奨学金を充実させるにはどんな情報や態度が必要かをグループディスカッションさせ、⑤奨学金をうけて大人になった人間（生徒自身）がグローバルな課題にどのような行動すべきかを個別に問うという流れである。

報告では、それぞれの問いに対する生徒の回答と分析が紹介された。生徒は、①ではその笛を作った子に与えるというリバタリアン的な回答が多く、②では本当は一番貧しい子に与えるべきだがみんながひいきしているから B という功利主義的な回答が多くなり、③では情報がわからない C を除き、A と B に分散した回答となった。④では、拠出する・しないという結果がクラスによって分かれ、利己的、利他的な意見がでて、⑤では、最も利益をだして株主還元している企業に投資して奨学資金を積み立てるという回答が一番多いという結果が紹介された。

授業の結果から、蘆名先生は、生徒はリバタリアンが多いが、利他心がないわけでない。しかし自分自身の将来の不安があると、他者への寄付はなかなか出来ず、架空の村では利他性を発揮しても、現実の自分に置き換えるとなかなか厳しいと指摘され、質問や金額や状況などの制度の設計によって生徒の回答はかわってくるかもしれないとまとめられた。

検討では、この授業からどのような人間像やや社会システムが構想されるか、ストーリーのなかの三人の子どもの性格付けがそれぞれの質問で同一のものなのか、特にリバタリアンが支持しているとされている C に関してはどうか、この授業から生徒の行動の変容が出てくる契機は何か、授業のなかでの生徒の様子はどうかなどの質問が出た。また、クラスによって回答に差が出た事に関しては、道徳と規範の違いではという感想や、なぜこの質問がされているのかを生徒が分かって回答しているか、特に奨学金に関してはどうかという質問もあった。

蘆名先生からは、利己性を克服するのではなく、小さくとも実践できる生徒を育てたいこと、授業のなかではあいつがこんな発言をするのかというつぶやきや、所有権などという普段使わない用語が頻繁に使われていることなど生徒の変化が紹介され、指摘された点に関してはさらに考えたいとの回答があった。

(2)新井より「2025 年度共通テストの分析」の報告があった。

本年度の共通テストは、現行学習指導要領の完全実施後初めてのものであるが、新井は、元教員として経済教育の観点から注目した問題を取上げての報告となった。

「公共」および「公共、政治・経済」では、4 題が取上げられた。

「公共」では、大問 2 で登場した、「社会的共通資本」の資料、「公共、政治・経済」では、ふるさと納税、韓国の労働政策を導入にした日本の外国人労働者問題、農産物を巡る需給曲線のシフトに関する計算問題が注目すべき問題としてそれぞれ紹介された。

旧「政治・経済」と旧「現代社会」では、旧「政治・経済」でのスミスの「見えざる手」の理解、旧「現代社会」での最低賃金を巡る問題などに注目したことが報告された。

また、他教科では、「地理総合、地理探究」でのウェーバーの立地論、「歴史総合、日本史探究」では、幕末のコレラ流行、松本清張をとりあげた現代史の問題が注目に値するとの紹介がされた。

関連して、日本経済新聞のコラムの共通テストに関する内容と、そこで取上げられている『通商白書』のグラフの紹介もされた。

総括として、テストを通しての授業改善を投げかけている方向性は明確であり、それに対応する授業の見直しを進めること、大学入試センターが公表している問題作成方針からみて、教科書には出てこない資料や概念、理論、時事問題が登場する可能性があること、歴史総合や地理総合など関連教科の問題も視野に入れた授業が求められるであろうことなどが指摘された。

新井の報告を補足する形で、杉田孝之先生(千葉県立津田沼高等学校)から、受験生を指導した立場からのテストを通しての授業改善提案が紹介された。

新井報告にあったように、「知識」以外にも「読み取り」問題が多い現状から、教科書の統計だけでなく、白書等の統計の読み取るトレーニングが求められること、授業者がこころがけたいこととして、教科書の学習順序の再検討、生徒に授業で考えさせる場を設定するための時間の確保、カリキュラムマネジメントを意識して家庭科など重複している単元を共有して時間を産み出すことが必要であるとの指摘がされた。また、1 時間の授業展開案のひな形も提示されたが、時間の関係で詳細は触れることができなかった。

検討時間がとれなかったが、試行以来の路線が調整されてきて落ち着いてきているという感想、多様な内容の分析のフレームワークを明確にして、新しい状況は何かをもう少し明示して欲しいとの要望などがあった。

(3)鈴木深氏(東京証券取引所)より、今夏の経済教室に関する準備の要請があった。

日程、会場、方式、主な内容などを 2 月末までに提示して欲しいとのことで、企画をネットワークとして早急に詰めることになった。

以上、記録　新井

次回開催予定:未定　時間も未定。

場所:未定

内容:春の経済教室の総括、授業実践の報告、検討など